

# アメリカの大学におけるコメンズメントスピーチ (七)

トニ・モリスン、ランデイ・パウシュ

小笠原 はるの  
遠藤 昌子

本稿では、現代におけるスピーチ文化の一端を担う二つのコメンズメントスピーチについて考察する。アメリカの大学の卒業式は「始まり」を意味するコメンズメントと呼ばれ、コメンズメントスピーチが欠かせない存在となっている。社会の指導的地位にある人々の中から選ばれたスピーカーが多くの場合、名誉博士号を授与された返礼として、卒業生に饒の言葉（コメンズメントスピーチ）を送るのである。二〇一一年にラトガース大学で行われた卒業式には社会派作家トニ・モリスンがスピーカーとして招かれ、二〇〇八年にカーネギーメロン大学で行われた卒業式には同校の卒業生で教授でもあるランデイ・パウシュがスピーチを披露した。彼らが語りかける言葉には聞き手の心を動かす力があり、スピーチが持つ社会的影響力に注目が集まっている。ここでは、それぞれのスピーカーについて紹介したうえで、スピーチの翻訳を試みる。

## 一、トニ・モリスンについて

私はまだ限界に達したと思ったことはありません。私は、黒人の話し言葉が本来持っている力を回復し間違えようがなく私のものでありながら、黒人の伝統にあてはまる小説を書きたいのです。 トニ・モリスン<sup>\*1</sup>

トニ・モリスンは黒人作家である。自らの祖先がかつて奴隷だった時代の物語をマイノリティとして今もなお書き続けている。一九三一年にオハイオ州ロレーンで生まれたモリスンは、幼いころから文学に興味を示し、黒人大学の名門、ハーワード大学、その後コーネル大学で英文学を学んだ。知識人として教育を受けた彼女は、プリンストン大学などいくつかの大学で教鞭をとりながら、『青い眼がほしい』（一九七〇年）、『スーラ』（一九七四年）、『ソロモンの歌』（一九七七年）、『タール・ベイビー』（一九八一年）、『ピラヴド』（一九八八年）など、多くの小説を発表し、評価を獲得して、一九九三年アメリカの黒人作家として初のノーベル文学賞を受賞する（写真一、二）。この他にも全米批評家協会賞、アメリカ芸術院賞、ピューリッツァ賞など受賞し、同じく黒人であるアリス・ウォーカーと並



写真1 ノーベル文学賞受賞式で  
Winners of the Nobel Prize in Literature,  
ニューヨーク・タイムズ紙  
<http://www.nytimes.com/ref/books/nobel-prize-literature.html> (2013年12月21日取得)

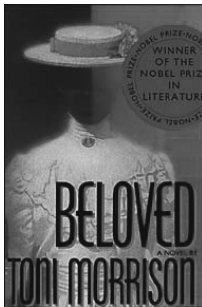


写真2 トニ・モリスンの代表作『ピラヴド（愛されしもの）』（1988年）

んで、アメリカ黒人女性文学を代表する作家としての地位を確立している。<sup>\*2</sup>

八十歳も過ぎ、晩年の月日を送るモリスンがラトガーズ大学で行ったコメンズメントスピーチは、次世代へ向けの深い思いから発せられた魂の叫びでもあった。物語を通じて、化石化したことばを語り直すこと、グローバルズムに毅然と立ち向かい、未来に向かって自由と平等を積極的に形成していくこと——そこには、ことばと人義を尽くして、世の中の意識を変えようと努めてきたモリスンの志がみられる。

ここではモリスンのスピーチの基盤ともなっている「物語ることば」について考察を試み、スピーチを理解する一助としたい。

### 自分のことばで創造する

トニ・モリスンは、十七世紀末から現代に至る、さまざまな時代における黒人の姿を描いてきた。特に、人種と性という二重に抑圧された女性の存在を文学に挿入しようとしてきた。登場人物はあるときは安住の地を求め、またあるときは自らのルーツを求めて人生をさまよう。その小説の全てに奴隷制と人種差別の文脈が流れ、それがたんなる「抵抗文学」にならず、人間にとっての「普遍性」が浮かびあがる物語に仕立てられている。それこそが、モリスン文学の大きな特徴といえよう。<sup>\*3</sup>

では、奴隷制の非人間性を声高に非難せずに、モリスンはどのように世界を描いているのだろうか。彼女は、過去の遺産に対する深い素養をもとに、まだ誰も語っていない黒人の物語を語り、すべての既成価値を根本から洗い直し、今までにないストーリーと表現技法によって作品を生み出している。非人間かつ暴力的、抑圧的な体験をし

ているものにとっては、それを体験している最中には体験していることを言語化できない。万人にわかるように、わかりやすく語るということは不可能である。それゆえ、そのような体験を共同体で記憶し、語り継いでいくことは難しい。黒人の多くの体験が語りえぬものとして消えていつているなか、それらを文学作品にまで高めようとしたところにモリスンの作家としての創造的情熱がみられる。

当時の私たちは、これらの経験の記憶が、本を書く素材になるほど重要だとは夢にも思わなかった。だがそれこそが私たちの生活、黒人女性の無言の真実だったのであり、私たちの心や頭の中に静かにたくわえられ、その真の意味を明らかにする力を持った福音伝道者の到来を待っていたものだ。<sup>\*4</sup>

モリスンはそうした語り得えないものに耳を傾け、それらを自らのことばで語り直し、不完全な語りの中に不出の体験の存在を浮かび上がらせようとした。これまで語り得なかつたさまざまなナラティブ、それも既成のことばではない自分のことばでしか表現できないナラティブを組み合わせて、多義的に物語を構成していったのである。

潜在的民族文化を顕在化させ、普遍化させ、市民権を与えるためには、既成のことばで記録するだけでは不十分だ。新しい関係、新しい構造を持った新しい比喻である自分自身のことばを創りださなければならぬのだ。なぜなら、ことばというものは世界の構造の写しなのだから。つまり、黒人女性の身体の隅々に浸み込んで、その思考のすべてを支配している表現手段としてのことばは、実は白人の、男性の、優位の下に創りだされた道具だったのだから。したがって、本当の意味で自分自身を存在させるためには、世界を隈な

く覆いつくしている多数派のことばを、自分なりに咀嚼して、他人のことばを自分のことばに作りかえると  
いう、必死の錬金術的操作が要求される。

やがて、自分の居心地のよい場所を見つけ出し生を全うするための女性の努力は、かつての「自我の確立」  
というスローガンから、「ことばの発見」という表現へ変容することになる。

モリスンはそこに気づいた作家なのだ。<sup>\*5</sup>

あらたに発見されたことばで、混沌とした複雑な物語がつむがれる場合、読み手にとって理解できない謎の部分  
が残る。しかし、あらたなことばが、混沌としてすぐには意味をなさない世界を提示しているからこそ、重層的な  
解釈が求められ、読者の意識の変容もうながされる。「ことばは世界の構造を変える戦略としての方法意識を担わさ  
れる」<sup>\*6</sup>。これこそが、モリスンが文学を通して追究しているものではないだろうか。つまり、モリスンの作品は、絵  
画や音楽と同様に、表現の美を放ちつつも、現実の世界ではない、別の現実を生み出そうとする意識変革をうなが  
すものであるということだ。

### 自分のことばで「物語る」

モリスンにとって、自分にふさわしい語法と文体の創造は必要不可欠だった。こういった課題にモリスンは、声  
を活かしながら文学を語ることを試みた。

モリスンは「書く」といわずに「物語る」という。これは何を意味するのだろうか。

いつてみれば、書くということは、わたしたちの文化の特質に逆らう行為なのよね。集団の記憶は語ること、語り伝えることによって受け継いできたけれど、それができなくなっている。わたしは語りつく世代の最後に来た者だと思う。じつは、書かなければならないという現実は、わたしたちがもはや記憶することのできない者たちになりつつある、記憶できないほど愚かになっているということの意味してもいいわけよ。<sup>\*7</sup>

モリスンにとって「書く」とは「物語る」ことである。記憶し、口承する力を失いつつあるから、文字で語るのである。このことは彼女の文学作品だけではなく、ノーベル文学賞受賞の演説にもみられる。

「むかしむかしのことでした……」

モリスンは演説をむかしから人々が口伝えて語りついできた方法で始めている。彼女が幼いころから親しんできた民話である。主人公は黒人で奴隷の娘であるお婆さん。盲目であるが、賢く、町の人々から敬われている。そのお婆さんのところへ近所の子どもたちがやってきてこう訊ねる。

「お婆さん、僕の手の中に小鳥がいるんだけど。小鳥は、生きているか、死んでいるか」。<sup>\*8</sup>

長い沈黙の後、ようやく口を開いたお婆さんは、穏やかでありながら毅然と応える。

「わからないねえ。あんたが持っている小鳥が、死んでいるのか、生きているのか、わからないねえ。でもはっきりしているのはね。それがあんたの手の中にあるということ。あんたの手中にあるってことだよ」<sup>\*9</sup>

子どもたちは、盲目のお婆さんの無力を証明して、自分たちの力をひけらかさそうとした。モリスンはそう読み解きながら、つぎのように述べた。

目が見えないお婆さんは、力そのものではなく、力を行使する手段へ注意を向けました。∴（子どもたちは）小さな命に対して責任がある、と言われたのです。<sup>\*10</sup>

そうして、手の中の小鳥をめぐるやりとりを通して、モリスンは自らの作品におけることばのあり方を探っていく。

手中の小鳥の意味を、私は強い好奇心から（小さな弱い存在であること以外について）考えをめぐらしてきましたが、特に今、この会場に私がよばれた自分の仕事を思い、深く考えをめぐらしています。それで私は、小鳥を言葉と解釈し、お婆さんを現役の作家と見なしたいと思います。お婆さんは、自分が夢を見る言葉、生まれたときに与えられた言葉が、いかに扱われ、使用され、またいかにして不埒な目的に使われるのを抑止できるか、心を砕いています。<sup>\*11</sup>

ここにはことばをめぐる考察を続けるモリスンがいる。新たな語りを呼び起こすことで、ことばに息を吹き込み、ことばを手にして行く。時間と労力と思索を惜しまずに、物事を理解しようとする。それだけがたしかなことばを手にしていく方法であるのだと。

ここでトニ・モリスンがアメリカ公立大学の名門、ラトガース大学で行ったスピーチを紹介する。揺るぎない信念の裏打ちのあるモリスンのことばを翻訳することは、国や文化を異にするわたしたちにも、大きな示唆や刺激を与えるものと考ええる。

〔小笠原〕

## 二、トニ・モリスンのコメンズメントスピーチ

(二〇一一年五月十七日 ラトガース大学にて)<sup>\*12</sup>(写真三、四)

### 自分の物語を生きる

トニ・モリスン

翻訳 小笠原はるの・遠藤昌子

卒業式は終わりではなく始まりの儀式。大学は卒業するけれど、新たな冒険、未知への挑戦が始まる。ラトガースで培った精神で道を切り拓くの



写真3 ラトガース大学でコメンズメントスピーチを行うトニ・モリスン

The New Yorker, June 6, 2011 "Oh, The Places You'll Go: Toni Morrison At Rutgers"  
<http://www.newyorker.com/online/blogs/books/2011/06/oh-the-places-youll-go-toni-morrison-at-rutgers.html> (2013年12月21日取得)



はこれから。

未来だけを見据え、現在いまに無関心でいいわけではない。未来はこの大学であなたたちがやってきたこと、わたしの世代が作り上げた混沌たる世界、そういう過去のの上に成り立っている。地球は崩壊寸前。彼方の地では独裁政治がはびこる。屈しまいとする人々には誰の耳にも届かない音楽に身をゆだねる涙を流す。川の流れに逆らって、金が動き、就労の機会も枯れ果てる。

政治家の討論はパンチとジュディのドタバタ調。昔ながらの大衆娯楽（写真五）。

善処いたします！ 否、却下いたします！

政治の力で！ 否、市民の力で！

女性を解放せよ！ 否、女性を保護せよ！

混沌たる世界は自己矛盾に満ちている。一方で混沌は新しい刺激を誘う。ポストモダンの終焉で、軀体と魂が解放され、豊かな英知が集積し、未来を生き抜く力となる。



写真5 パンチとジュディ  
イギリス国民の人気を集める荒唐無稽な人形芝居とそのキャラクター。マザーグースの一篇でもある。[http://en.wikipedia.org/wiki/Punch\\_and\\_Judy](http://en.wikipedia.org/wiki/Punch_and_Judy) (2013年12月21日取得)



写真4 ラトガース大学キャンパス  
<https://www.rutgers.edu/academics/academics-rutgers> ラトガース大学ホームページ (2013年12月21日取得)

ラトガースで手にしたのは、批判的思考力と最新の思潮。自己形成の基盤はできた。そこから意味ある人生を紡ぎだすのはあなた。

かつてジェファソンは生命と自由と幸福を求める権利を唱った。その中で幸福はなくてもよかった。草稿では土地、財産、奴隷を所有する権利と書かれていてその時代なら黒人のわたしも所有される立場だった。それよりはただ幸福の方が人間的。でも、幸福よりは、正義や品性、真実を求める権利と書いてほしかった。

意識していないかもしれないけれど、あなたが努力してきたのは、幸福になりたいから。友人や職業の選択も同じ気持ちから。でもそれだけでは不十分。それに甘んじないでほしい。もし自分の幸せしか念頭になく、社会貢献を試みなければ、不毛で無意味な人生になる。見かけ倒しで、社会の役には立たない。

未来の社会人として知ってほしいことがある。今、私たちは社会の風潮に踊らされ、市民としての自覚を失い、消費者に成り下がっている。もつとも最近単なる納税者。協力して地域を創成することもなく、人との関係はネットのみ。自立した大人になろうともせず、子供のままでいたがる。それが今の社会。

でも、次にどのような時代が来るかはわたしたちの想像を超えている。いつの時代もそうだった。学者やメディアがあなたたちの世代にどんなレッテルを貼ろうと、無視しなさい。Xジェネレーション、マジョリテイ、マイノリティ、タカ派にハト派、すべて関係ない。真に志のある人は、どんな立ち位置にしようとも、社会に役立つことをする。

当然ながら、あなたも社会の一員としての役割を担わなければならない。でも、あなたは個でもある。社会においても、宇宙においても、唯一無二の存在。あなたと同じ人生を歩んできた人はいない。あなたのクローンは作ることもできない。クローンと人間は同列には語れない。人間にはクローンにはない計り知れない奥深さが備わって

いる。まだ人間がなしえていないことも、将来可能かもしれない。今までに解明された以上のことが、やがて明らかになるかもしれない。あなたたちには真っ向から取り組んでほしいことがある。少しずつでもいいから、変えられるものから変えてほしい。

考えてみて。今のアメリカで当たり前なことが、百年、二百年、三百年後の人には驚きかもしれない。今の社会で革新的と思われることや、人生や仕事のあり方が、一笑に付されるかもしれない。

「なんだって!?! 教育を受けるのに個人が借金をしたり、仕事を掛け持ちしたって? 教育で国が豊かなのに、国が負担しなかったなんて信じられない。うそでしょ」

「国が人材育成に予算をつけなかったって?」

「昔はお金を払って水を買ったそうだけど、空気も有料だったの?」

「病気になったら、医療費の返済で苦しんだの? 会社が社員の医療保険まで切り詰めたってほんと?」

「大人でも危険な学校に、子供たちが通学していたって本当? 廊下や教室や校庭で銃を持ち歩く子がいたんだって?」

「女性は蔑まれ、中絶する権利もなかったって?」

「ゴミをあさりながら、ドラム缶や段ボールで暮らす人々がいたって本当? 災害の犠牲者が道端に捨ておかれ、野犬の餌食になっていたって本当? 国際社会がなにもせずに行ったってこと?」

次の百年で、自由の女神の台座に刻まれた精神が踏みじられ、暗黒の時代が来るかもしれない。わからないけれど、そうはしたくない。その頃にはあなたたちを受け継いだあの世代が、あなたたちが求めた世界を実現させているかもしれない。

あなたたちはここでしっかり学んだのだから、これからは想像の翼を広げて、果敢に挑戦すればいい。よりよい世界の創造に向けて思考を重ね、革新的な行動を起こして行けばいい。あなたたちはすでに、混沌とした時代の先行きの見えなさに対峙する英知を身につけてきた。

物語を綴るにはあなたがあなた自身であればいい。共感力を働かせて、弱い立場の人を尊重しよう。他人を苦しめることなく、自分と異なる人を恐れることなく、子供のころ植え付けられた偏見にしばられることなく、人間らしく生きていこう。自分の人生の物語は思い通りに展開しないけれど、物語を紡ぐのは自分自身。自分の作品の登場人物を完全に理解することはできないし、筋書きにない人物がひょっこりあらわれて邪魔したとき、うまくかわすこともできない。でも、そういう人ほど大切にするといい。無視したり、けなしたりしないこと。筋書きが変わって、手に負えなくなることもある。それでも物語のテーマはぶれないようにする。自分が何者であり、自分がこの

世界で何がしたいのかを自分のことばで紡ぎだそう。

そう、わたしも自分の人生を紡いでいる。だからわたしは楽観主義者。人の心はそもそも善良で、身勝手や不誠実を嫌い、正しい方向を目指すもの。わたしにはわかる。人生は奇跡ともいえるチャンスに満ちていて、それに命を吹き込むのはあなたたち。わたしにはわかる。人生は美しい素材に満ちていて、それに形を与えるのはあなたたち。

みなさん、あらためて卒業おめでとう。ご清聴ありがとうございます。

### 三、ランディ・パウシュについて

本稿では二〇〇八年五月に、カーネギーメロン大学のコンピュータサイエンスの教授であったランディ・パウシュが同大学卒業式で行ったコメンズメントスピーチの翻訳を紹介する。彼はこのコメンズメントスピーチから二か月後の七月に膵臓癌で四十七歳の生涯を閉じた。パウシュはこのスピーチの二年前に末期の膵臓がんを診断され、手術、治療を続けていた。一年前には再発が確認され、余命は三ヵ月から半年と宣告された。この卒業式は宣告された余命をすでに過ぎた時点で行われた。彼が卒業式でスピーチを行う事は彼の病状を考慮して公表されていなかった。当日、彼が卒業式に姿を見ただけで学生や教授陣は驚き、総立ちになって拍手で迎えたのだ。登壇した彼は、自分の足で立ち、言葉をかみしめながら話し始めた。スピーチはわずか六分のものであったが、自分が情熱を持てるものを探しそれを誠心誠意やり遂げようという卒業生へのメッセージと、最期まで楽しみながら生を全うしようという彼の姿勢は聞く者に深い感動を与えるものであった。そのコメンズメントスピーチの紹介に先立つ

てここでは彼の経歴を簡単に述べたい。

### 「親の宝くじ」一等賞

パウシユは一九六〇年にメリーランド州で生まれた。「親の宝くじ」というものがあれば、自分は一等賞に当たったと語る程、家族仲の良い安定した家庭環境で生育した(写真六)。両親ともに知識欲にあふれ、家族の食卓での会話にも百科事典が参照されたという。パウシユはブラウン大学で学士号、カーネギーメロン大学で博士号を取得した。その後、約十年間バージニア大学で教職につき、一九九七年からカーネギーメロン大学に着任した。彼はバーチャルリアリティーの分野では世界的な権威であり、コンピューターと芸術の融合を目指し、学生たちがバーチャルな世界を自由に往来しながらゲームを創作するコースを創設し、学内では評判の高い人気教授であった。

### 最後の授業 「子供時代の夢をかなえて」(写真七)

彼はカーネギーメロン大学から最後の授業を行うことを打診されると、逡巡したのちに承諾した。最後の授業というのは退官予定の教授が自分のこれまでの人生を振り返り、自分の専門分野の講義を行ったたり、人生



写真6 子供時代のパウシユ

Brown Alumni Magazine, November 2007

<http://www.brownalumnimagazine.com/content/view/1808/49/> (2013年12月10日取得)



写真7 カーネギーメロン大学での最後の授業

The New York Times, July 26 2008, [http://graphics8.nytimes.com/images/2008/07/26/us/26\\_pausch.650.jpg](http://graphics8.nytimes.com/images/2008/07/26/us/26_pausch.650.jpg) (2013年12月10日取得)



写真8 結婚式でのパウシュ

Brown Alumni Magazine, November 2007 [http://www.brownalumnimagazine.com/images/stories/2007\\_novdec/WEBPIX\\_400wide/61\\_pausch.6.32976.jpg](http://www.brownalumnimagazine.com/images/stories/2007_novdec/WEBPIX_400wide/61_pausch.6.32976.jpg) (2013年12月10日取得)

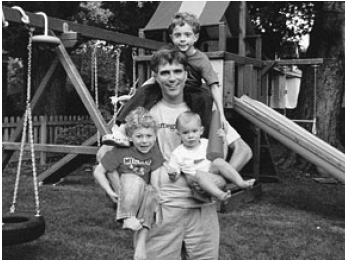


写真9 子供たちと

Oprah Com, April 23 2009 <http://images.oprah.com/images/tows/200904/20090423/20090423-randy-pausch-5-290x218.jpg> (2013年12月10日取得)

から学んだ経験や知恵を後輩たちに残すという趣旨の授業である。承諾した時点では、最新機器を備えた医療機関で手術や化学療法、放射線治療など高度な医療によってスピーチまでには、治療するのではないかと考えての希望もあった。また、そうでない場合にはその講義の記録が自分の幼い子供たちへの遺言となると考えてのことであったという。講義の内容に悩んだ末に、タイトルを「子供時代の夢をかなえる」と決めた。その直後の再検査で多臓器への癌転移が確認されたのだった。治療は望めず、六年前に結婚したばかりの妻と、末子は二歳という三人の子供を残して死ななければならない事に苦悩し、医療の副作用と闘いながらも講義の準備を進めた(写真八、九)。講義では、死への不安や残される家族への心配ではなく、死期が迫っても、まだ積極的に人生を楽しみ、命のある限り夢に向かって進む姿勢を明確に示そうとした。二〇〇七年九月、最後の授業が行われる当日、カーネギーメロン大学は、四五〇名収容の大教室を用意した。彼の授業を聞きたいという希望が強く、他大学にもサテライト中継する準備が整えられた。そのように準備したにもかかわらず、開始時間が近づくと、予想以上に人が詰めかけ、聴

衆は教室にあふれた。入りきれない人のために急遽、別教室に中継画像用のスクリーンが用意された。パウシユは当日まで悩みながらも綿密に準備を整えていたが、体調は悪く、授業開始直前まで、吐き気と下痢で苦しみ、控室では起き上がることが出来ず、ソファーに横にならなければならなかった。しかし、開始時間になると、元気に登場し、聴衆の前では健康が失われていない事をアピールしようと腕立て伏せまで実演したのだった。そして、一時間の長い授業を大成功で終えた。彼のメッセージは、夢を抱いて、それを実現するために全力で打ち込む、でも、たとえ夢がかなわなくても受け入れる、何より大切なのはその努力する過程を楽しむこと、というものであった。最後の授業を聞いた人々は、彼の前向きなメッセージに強く感動した。

### 最後の授業のその後

パウシユの最後の授業は、その日に彼の話を聞いた人を感動させただけにとどまらなかった。すぐに、動画投稿サイトユーチューブにアップされたが、たちまち彼の話は世界中で評判となった。わずか数日間で数百万人が彼のスピーチを視聴し、その後も継続して視聴されつづけ多くの人に感動を与えている。最後の授業から亡くなるまでの十ヵ月間に、彼は多くのメッセージを残している。二〇〇八年四月には、自分の思いや人生をつづった「最後の授業」という書物を出版したが、すぐにニューヨークタイムズ紙のベストセラーリストで一位になった(写真十)。この本の出版をきっかけに全米の主要マスコミが彼に注目した。タイム誌、ウォールストリートジャーナル紙、ニューヨークタイムズ紙など、全米の新聞や雑誌が彼のメッセージを掲載し、タイム誌は二〇〇八年の「今年の一〇〇人」の一人に彼を選出した。パウシユはテレビでも大きく取り上げられた。例えば、バーバラ・ウォルターズのインタ



ビューヤ、オープラ・ウインフリーショーなど全米に強い影響力を持つ番組に出演した。オープラの番組では、カーネギーメロン大学での最後の講義を再現してみせて、テレビを通じて幅広い層の人を感動させた。彼に残された日々は、治療に苦しみながら

も充実したものであった。最後の授業で彼が語った「子供時代の夢で実現しなかった」夢を、何らかの形でかなえたいと多くの人が力を貸したのだった。スタートレックの乗組員になりたかったという夢は、その最新版の映画に乗組員として出演することではかなえられた。NFLフットボール選手になりたいという夢はプロ選手と一緒に練習試合に出場することで現実のものとなった。

### カーネギーメロン大学について

ランディ・パウシュによる卒業スピーチと「最後の授業」が行われたカーネギー・メロン大学は一九二二年に工科大学として創設されたペンシルベニア州ピッツバーグにメインキャンパスを置く私立大学である（写真十一）。学部生の数は一万人を超え、工学、ビジネス、芸術、人文社会学に加え、ロボット工学、コンピュータサイエンスなど特色ある分野の教育を行っている。米国以外にも日本を含むアジア、オーストラリア、ヨーロッパなどに修士課程が設置されている。ノーベル賞受賞者は数学者のジョン・ナッシュなど十三名で、USニュースの二〇一〇年のランキングでは総

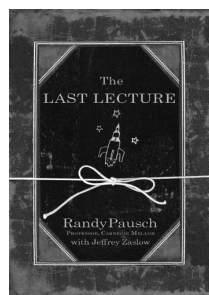


写真10 著作 The Last Lecture の表紙  
Randy Pausch Home Page at Carnegie Mellon University  
<http://www.cs.cmu.edu/~pausch/> (2013年12月10日取得)



写真11 カーネギーメロン大学ピッツバーグ本部キャンパス  
[http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/11/Cmu\\_panorama.jpg](http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/11/Cmu_panorama.jpg) (2013年12月10日取得)

合で二十三位と評価されている。本稿でその翻訳を紹介するのはピッツバーグのメインキャンパスで行われた卒業式でのスピーチである。

〔遠藤〕

#### 四、ランディ・パウシュのコメンズメントスピーチ

(二〇〇八年五月十八日 カーネギーメロン大学にて)<sup>\*13</sup> (写真十二)

あと半年といわれたら

今この場にいられて嬉しい。どこだって生きていれば嬉しいけどね。コーヘン学長に君たちの門出を応援してほしいといわれたけれど、むしろほくが応援されている気がする。君たちのエネルギーはすごいね。

この大学は最高だよ。こことはいろいろな縁があった。大学院の入試で一度は不合格だったものの、あとから「入っていいよ」といわれた。十数年経って、今度は教える側として呼び戻され、この上ないチャンスを与えられた。やりたいいことをとことんまでやるというチャンスだ。

この大学が素晴らしいのは、他の大学とは違ってやる気のある人間の足を引ッ

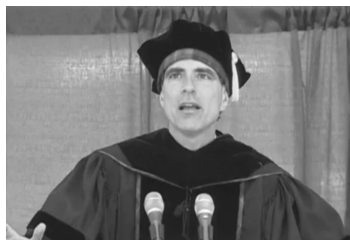


写真12 カーネギーメロン大学卒業式  
カーネギーメロン大学ホームページ  
[http://www.cmu.edu/homepage/images/2008/alGoreGrad\\_236x236.jpg](http://www.cmu.edu/homepage/images/2008/alGoreGrad_236x236.jpg) (2013年12月10日取得)

ランディ・パウシュ

翻訳 小笠原はるの・遠藤昌子

張らないことだ。他にないよ、こんな大学。この大学とここで出会った仲間ほど大事なものはない。学長はじめ、みんなのおかげだと思う。

二〇〇七年の八月の終わり、ぼくはあと三ヶ月、せいぜい半年と宣告された。でもそれから九ヶ月が経った。さすがにもう腕立て伏せはできないけど、このあとバスケットをする予定だ。宣告から半年を過ぎたころ誰かがこういった。

「スゴッ、死神さまも君には負けたね」

ぼくは思わず言い返した。「勝ち負けじゃないさ。長生きすればいいってもんじゃない。いい生き方をしたかどうかだ。誰にでもいざれ死神はやってくる。大切なのは、生まれてから死ぬまで、どう生きるかなんだ。やりたいことはすぐやること。死神が忍び寄ってきてからではもう遅い」

ありふれた言葉だけど、ぼくはこういいたい。やらずに後悔するより、まずやりたいことをやってみよう。ぼくは馬鹿なことたくさんしてきたけど、ちっとも気にならない。間違いもしたし、恥ずかしい失敗もあったけど、どうってことない。大切なのは人生の最後にこう思えること。

「面白そうと思ったものにはなんでも飛びついた」

ぼくはそれを心のよりどころにしてきた。

今伝えたいことばがある。情熱だ。情熱を傾けられるものを見つけることだ。もう見つけた人もいるだろうし、まだの人もいる。三、四十代になるまで見つからない人もいるだろう。でもあきらめてはいけない。あきらめたら、あとは死神のお迎えを待つだけ。夢中になれるものを見つければ、身を任せるんだ。人生の先輩としてきみたちに伝えたいのは、モノやお金に情熱を傾けるのはバカバカしいということ。お金やモノはいくらあってもきりがない。周りを見渡せば、自分よりもっと持っている人がいるんだから。

心の内側から湧き出る情熱を大切に。世間の賞賛や名声を得るのは悪くないけれど、大事な仲間にも認められる方がはるかに意味がある。自分が尊敬する人から褒められたら、天にも上る気持ちだよ。

なりふりかまわずやってみよう。どんな仕事でも、どんな立場でも、まわりの人の心を打つのは全身全霊を傾けている姿だ。そうしていれば、たとえ自分がいなくなっても周りの人の心に生き続けられる。

心から愛せるものを見つけ、情熱を燃やして生き、まわりから応援してもらえたら、それ以上のものはない。ぼくは三十九歳になってやっと結婚した。自分より大切だと思える人に巡り会ったからだ。きみたちみんなも心から愛せるものを見つけ、情熱的な人生を送ってほしい。

(本稿は平成二十五年度札幌大学研究助成による成果の一部である。)

注釈

- \* 1 木内徹・森あおい共著『トニ・モリスン』（現代作家ガイド）、彩流社、二〇〇〇年
- \* 2 加藤恒彦『アメリカ黒人女性作家の世界 小説に見るもう一つの現代アメリカ』創元社、一九八六年、一一八ページ
- \* 3 加藤恒彦『アメリカ黒人女性作家論 アリス・ウォーカー、トニ・モリスン・グロリア・ネイラー』お茶の水書房、一九九一年
- \* 4 勝方恵子『負の女性像——トニ・モリスン『青い眼がほしい』——』小池美佐子、原恵理子編著『現代アメリカ文学の女性像』勁草書房、一九八五年、一五六—一五七ページ
- \* 5 勝方恵子、一五六—一五七ページ
- \* 6 勝方恵子、一五七ページ
- \* 7 藤本和子『過去を名づける』（解説）『青い眼がほしい』トニ・モリスン著、大社淑子訳、朝日新聞社、一九八一年
- \* 8 トニ・モリスン、ノーベル文学賞受賞演説、荒このみ編訳『アメリカの黒人演説集 キング・マルコム・モリスン他』岩波文庫、二〇〇八年、三五—三六ページ
- \* 9 トニ・モリスン、ノーベル文学賞受賞演説、三五二—三五三ページ
- \* 10 トニ・モリスン、ノーベル文学賞受賞演説、三五二—三五三ページ
- \* 11 トニ・モリスン、ノーベル文学賞受賞演説、三五三—三五四ページ
- \* 12 Toni Morrison's Commencement Address to Rutgers University, Class of 2011, <http://lanoralleynce.com/2011/05/toni-morrison-commencement-address-to-rutgers-university-class-of-2011/>（二〇一三年十二月二十一日取得）
- \* 13 Professor Randy Pausch Graduation Speech, <http://gradspeeches.com/2008/carnegie-mellon-university/professor-randy-pausch/>（二〇一三年十二月二十一日取得）

参考文献

- Randy Pausch & Jeffrey Zaslow, "The Last Lecture," New York: Hyperion, 2008
- Randy Pausch Home Page, Carnegie Mellon University, <http://www.cs.cmu.edu/~pausch/>（二〇一三年十二月十日取得）
- Oprah Winfrey Home Page, Nov. 9, 2011, "What Oprah Learned from Randy Pausch's Last Lecture", <http://www.oprah.com/oprahslife/class/What-Oprah-Learned-from-Randy-Pauschs-Last-Lecture-Video>（二〇一三年十二月十日取得）

Time Magazine, May 12 2008, The 2008 Time 100 "Randy Pausch." [http://content.time.com/time/specials/2007/article/028804\\_1733748\\_1733756\\_1736194\\_00.html](http://content.time.com/time/specials/2007/article/028804_1733748_1733756_1736194_00.html) (二〇〇八年十二月十日取得)

New York Times, July 26, 2008, "Randy Pausch, 47, Dies: His 'Last Lecture' Inspired Many to Live With Wonder.", [http://www.nytimes.com/2008/07/26/us/26pausch.html?\\_r=0](http://www.nytimes.com/2008/07/26/us/26pausch.html?_r=0) (二〇〇八年十二月十日取得)

荒このみ編訳『アメリカの黒人演説集——キング・マルコムX・モリスン 他——』岩波書店、二〇〇八年  
大社淑子著『トニ・モリスン創造と解放の文学』平凡社、一九九六年

勝方恵子著『負の女性像——トニ・モリスン『青い眼がほしい』——』小池美佐子、原恵理子編著『現代アメリカ文学の女性像』勁草書房、一九八五年、一五四ページ—一七五ページ

加藤恒彦著『アメリカ黒人女性作家の世界 小説に見るもう一つの現代アメリカ』創元社、一九八六年  
加藤恒彦著『アメリカ黒人女性作家論 アリス・ウォーカー、トニ・モリスン・グロリア・ネイラー』お茶の水書房、一九九一年

加藤恒彦著『トニ・モリスンの世界——語られざる、語り得ぬものを求めて』、世界思想社、一九九七年  
木内徹・森あおい共著『トニ・モリスン』(現代作家ガイド)、彩流社、二〇〇〇年

ランデイ・パウシユ・ジェフリー・ザスロー共著、矢羽根薫訳『最後の授業』ランダムハウス講談社、二〇〇八年  
ジェイ・パウシユ著、小川敏子訳、『もう一つの最後の授業』講談社、二〇一三年

藤本和子著『過去を名づける』(解説)『青い眼がほしい』(女たちの同時代——北米黒人女性作家選) トニ・モリスン著、大社淑子訳、朝日新聞社、一九八一年

エリザベス・A・ポーリユー編、荒このみ訳『トニ・モリスン事典』雄松堂出版、二〇〇六年  
トリン・T・ミンハ著、竹村和子訳『女性・ネイティヴ・他者 ポストコロニアリズムとフェミニズム』岩波書店、一九九五年

トニ・モリスン著、吉田迪子訳『ピラヴド』集英社、一九九八年  
トニ・モリスン著、吉田迪子訳『アメリカ文学の大統領は、誰か?』集英社、一九九八年

吉田迪子著『トニ・モリスン』(Century books—人と思想) 清水書院、一九九九年